

My Best Book

ARCHITEKTUR DENKEN PETER ZUMTHOR

建築を考える ペーター・ツムトア 鈴木仁子訳

建築の純度へ 松田 周作

大分という地は、世界的に活躍する磯崎新氏はもちろんのこと、アルカイックの首藤廣剛氏、そのお弟子さんの塩塚隆生氏、あるいは、淺井康行氏など、大分固有の「建築の純度」の高い建築家や建築文化が綿々と紡がれている、極めて希有な地として、私の目には映ります。

また、学生時代に見学した中津にある槇文彦氏の「風の丘葬祭場」は、今なお、私の最も感動した建築体験です。建築行為においても、日田の原田進氏による左官など、大分固有の建築の可能性を感じます。

大分という地で、建築と向き合う幸運にあって、「建築の純度」の高い、大分固有の建築文化の魅力により惹かれ、「建築の純度」への意識は、自ずとより強いものとなります。

その大分で建築と向き合う自身のベンチマークとして、ペーター・ツムトア氏の『建築を考える』を据える次第です。ペーター・ツムトア氏の『建築を考える』に紡がれた一文一文は、ローカルアーキテクトとして生きていくことを決意する私の心に、すっと馴染んでくる示唆に富んだ言葉で溢れています。

「あらかじめイメージを描いておいて、それを与えられた課題に即して変えていく、という方法を私たちはどうらず、基本的な問い合わせに答える努力からはじめたのである。立地、建物の役割、素材——山、岩、水——についての、当面は具体的なイメージを伴わない問い合わせだった。

「場所や素材や役割に関する問い合わせに徐々に答えられるようになってきたとき、私たち自身が驚くような構造と空間がじわじわと現れてきた。あらかじめ決められた様式にもとづいた形態をアレンジするよりもずっと奥の深い、根源的な力を秘めた構造や空間になってと思っている。」

「私が興味をおぼえ、想像力をかたむけたいと思うのは、物から乖離した理論のとしての現実ではなく、この〈住むこと〉に向けられた具体的な建築課題としての現実なのだ。それは、石とか布とか鋼とか革とかいった、建築材料の現実であり、建物を建てるために用いる構造の現実である。」

「私はもう一度肝に銘じる——仕事においては、まずはシンプルで実用的な物から思考をはじめるここと、そしてそれを大きく、良く、美しくすること、特殊な形にいたるにはあくまでも物を出発点とすること。職人技のなんたるかを知っている匠のごとくに。」

「精確に見る、愛する、いたわる、適切な寸法を見出す、計画している建物を脳裡でくり返し風景のなかに据えてみて、風景に受け入れられているかどうかを吟味する。その風景の寸法をいつでも感じていられるように努力する。理屈や理論ではない、心の眼で見つめることによってである。」

ペーター・ツムトア氏の言葉は、ここ大分という地のローカルアーキテクトであればこそ、私たちの心に沁み渡り、勇気づけてくれるものと信じております。

ぜひ、皆さんにもご一読を頂けましたと願い、私の「My Best Book」と致しました。